

第四回 さかいの里山のはなし

著者	石井 実
引用	上方文化研究センター研究年報. 2002, 3, p.94-97
URL	http://doi.org/10.24729/00005323

第四回

さかいの里山のはなし

大阪府立大学大学院農学生命科学研究科 石井 実

1. 昔はただの山だった

「おじいさんは山に柴刈りに・・」というおなじみの「桃太郎」の書き出しは、里山と農民との密接な関係をよくあらわしている。おそらく、当時は里山という言葉はなく、それは単なる山であった。しかし、この「桃太郎」に出てくるサルやキジをはじめ、「カチカチ山」のタヌキ、百人一首に登場するシカ、ホトトギス、ヤマザクラなどは、まさしく里山の動植物であり、私たちの祖先と里山のつながりの深さを物語っている。

2. 里山のルーツは？

里山を農用林と定義するならば、その歴史は縄文期に遡る。最後の氷期（ウルム氷期）が終わり、暖かさが戻りはじめた一万年以上前、私たちの祖先が定住生活に入り半栽培あるいは焼畑農耕を開始したらし

い。ナラ林文化と呼ばれる東日本の祖先たちの生活様式は、狩猟や漁労ばかりでなく、グリやクルミ、トチノキなどの木の半栽培を行っていたことで特徴づけられるという。おそらく、これらの木の実は縄文人により積極的に保護・管理され、すでに里山の原型ができあがっていたと思われる。弥生時代の初期、堺をふくめ大阪の低地は深い照葉樹林に被われていたが、水田稲作の開始により、祖先の森に対するインパクトは次第に強くなった。しかし、温暖で降水量の多い気候風土に助けられ、集落の背後の丘陵にはアカマツやコナラ、クヌギなどの二次林が発達した。この二次林こそが里山であり、その後、今日に至るまで、私たちに燃料や肥料、食物、木材などを持続的に供給してきた。江戸時代、肥料として水田には里山の草や若葉などが投入されたが、この刈敷と呼ばれる肥料を得るためには、水田面積の数倍の里山が必要であったといわれている。その後、金肥と呼ばれる油粕や干鰯、下肥などが導入されると、刈敷投入量は減少したが、堆肥や木灰など

の肥料はやはり里山から得ていた。

里山は炭（木炭）の供給源としても重要であった。炭は「枕草子」に冬の風物詩として登場するのをはじめ、各時代の和歌などにも詠みこまれている。中世、近世には産地も安定し、近畿地方には近江、大原、山城、池田、横山、光滝、大和、紀州などの炭の大供給地があった。

3. 里山は野生生物の宝庫

里山は、農民により維持・管理されてきた林だが、多様な生物が生息し見事な生態系が成立している。落葉広葉樹を主体とする高木層の下部には多くの種からなる低木や林床の植生が発達し、そこから始まるさまざまな植食者と肉食者、腐植者の関係する複雑に絡み合った食物網が見られる。これは植物が生産した有機物を、動物など無数の従属栄養の生物が分かち合いながら、最終的には植物が利用できる無機物に戻す物質循環システムであるが、個々に見れば、捕食、被食、寄生、共生、競争など生物間の利害関係がそこにある。

堺の里山は、今では南部丘陵にその名残をとどめるだけだが、コナラやアカマツを主体とする林には多くの野生生物が生息している。たとえば、一九九三年に行われた生物相の基礎調査によると、ここには農耕地部分も含めて一一五科六四六種の植物、一三目二七科六四種の

さかいの里山のはなし

鳥類、二目五科九種の両生類、二目五科八種の爬虫類、一六目二〇四科九二九種の昆虫類などが確認されている（堺市南部丘陵検討委員会、一九九四）。里山部分では、春にはコバノミツバツツジやシヨウジョウバカマ、夏にはササユリ、秋にはリンドウと四季おりおりの植物が花を咲かせる。鳥類ではオオタカやハイタカ、フクロウ、サンコウチヨウ、オオルリなどが見られるほか、ミドリシジミ類やミドリヒヨウモン、クワガタムシ類などの昆虫類も生息している。

私の研究室では、チョウ類を指標として大阪周辺の緑地の環境を調査しているが、大泉緑地や大仙公園のような人造の緑地とは異なり、里山には「日本的な」種が豊富に残されていることがわかった。大阪のチョウ相は、ユーラシア大陸北部と共通の旧北区の要素と東南アジアの熱帯から北上してきた東洋区の要素が主体であるが、里山の落葉樹林に残された種は日本海を取り巻く分布圏をもつ日華系のものが多い。例えば、日本の国蝶オオムラサキや春の女神と呼ばれるギフチョウも日華区系である。

4. 里山の崩壊

里山に顕著な変化の兆しが見え始めたのは一九六〇年代頃からである。名神高速道路や東海道新幹線の開通、東京オリンピックや万国博覧会の開催はこの頃で、日本の高度経済成長期といわれる時代であっ

た。これより少し前にいわゆる燃料革命が起り、薪や炭にかわって石油やプロパンガスなどの化石燃料が普及し、堆肥や木灰にかわって化学肥料が使われ始めた。この頃、里山は本来の価値を失い、開発の対象になり始めた。

不要になった里山は、都市近郊では宅地開発や道路建設、ゴルフ場の造成などで消滅あるいは縮小、分断化した。開発されればそれまでだが、里山は、仮に残されても放置されればネザサが繁茂し林床の草本類が光を奪われて消滅するなど変質し始める。これは遷移という自然の摂理である。近畿地方の低地では、遷移が進むと里山は照葉樹林になってしまふ。照葉樹林になってもよいという人もいるかもしれない。しかし、市街地の海に囲まれた里山ではそうはいかない。遷移の進行とともに里山独特の生物相が失われるだけで、決して豊かな照葉樹林になるわけではない。

近年の里山の崩壊は、そこに独特の野生生物たちを絶滅の危機に陥れている。環境省のレッドデータブックには、ギフチョウやオオムラサキといった里山のチョウたちのほか、里山の生態系の頂点に立つオオカキなどもリストアップされている。そして、何より寂しいのは、カブトムシやクワガタムシ類をはじめとする身近な里山の生物の減少である。

5. 農民にまもられてきた半自然

里山は燃料や肥料を得る林であったため、農民が利用しながら維持してきた。近畿地方の里山の多くはコナラやクヌギ、アカマツで構成され、二〇年前後の周期で伐採され、若返りがはかられてきた。といっても、皆伐するのではなく、いくつかの区画を数年ごとに順に伐採するというやり方だったようである。伐採後、次の伐採までの間には、間伐や下刈り、落ち葉かきなどが行われ、農民はそれらを薪あるいは炭や堆肥の原料として利用していた。したがって、里山は本来の意味での自然林ではなく、人間の営みにより一定の遷移段階をとどめてきた半自然林とでもいべき林である。

里山の崩壊が時代の流れである以上、里山とそこに生息する生物たちを守るのには簡単なことではない。まず、本来の価値を失った里山を何とか残す道を探らねばならない。仮に里山が残せたとしても、間伐や下刈り、落ち葉かきなどの里山の遷移を止める管理作業を永遠に続けなければならぬ。スズムシをひとつの容器で飼いつづけていると何年かすると近親交配の悪影響で全滅するように、ひとつの里山を孤立させるとやがて野生生物の破滅が訪れる。したがって、里山の生物を永続的に守るには、彼らが自由に交流できるような里山のネットワークを維持しなければならない。

6. 広義の里山をまもろう

私たちが今後、いつまでも日本人らしく生活を続けるためには森が必要である。とくに人里の周辺には、これまで日本人の身近にあった里山を残したいものである。その場合、狭義の里山は薪炭林部分をさす、実際には里山は稲作と結びついて維持されてきたものであり、広義にとらえれば、里山は水田やため池、水路からなる稲作水系と一体の自然ととらえるべきであろう。例えば、ため池や水田で繁殖するヒキガエルやタガメなどは里山で越冬するし、マユタテアカネやオオアオイトトンボなどのトンボ類は稲作水系で羽化すると里山に入り込んで生活する。里山は稲作水系に水を供給する緑のダムということもできる。里山だけを切り離した場合、自然公園や学校の杜、野生生物のビオトープなどとして維持していく方法が考えられるが、できれば日本の原風景ともいえる谷津田や棚田とセットになった美しい広義の里山の景観を後世に残したいものである。

参考文献

- 藤本 篤・前田豊邦・馬田綾子・堀田暁生（一九九六）大阪府の歴史、山川出版
樋口清之（一九九三）木炭、法政大学出版社

さかいの里山のはなし

日浦 勇（一九七三）海を渡る蝶、蒼樹書房

日浦 勇（一九七六）大阪・奈良地方低地における蝶相とその人為による変

貌、自然史研究

日浦 勇（一九七八）蝶のきた道、蒼樹書房

石井 実（一九九七）里山の昆虫、チョウ相の変化、「里山の自然（田端英雄

編）、保育社

石井 実（二〇〇〇）里山の歴史と復権、「里山大百科」、TBSブリタニカ

石井 実（二〇〇一）森林文化とチョウ相の成り立ち―大阪での考察、「照葉

樹林文化論の現代的展開（金子 務・山口裕文編）」、北海道大学図書刊

行会

石井 実・広渡俊哉・藤原新也（一九九五）「三草山ゼフィルスの森」のチョ

ウ類群集の多様性、環動昆

石井 実・山田 恵・広渡俊哉・保田淑郎（一九九二）大阪府内の都市公園

におけるチョウ類群集の多様性、環動昆

石井 実・植田邦彦・重松敏則（一九九三）里山の自然をまもる、築地書館

守山 弘（一九八八）自然を守るとはどういうことか、農山漁村文化協会

佐々木高明（一九九三）日本文化の基層を探る―ナラ林文化と照葉樹林文化、

日本放送出版協会

安田喜憲（一九八〇）環境考古学事始―日本列島二万年、日本放送出版協会

安田喜憲（一九九二）日本文化の風土、朝倉書店